

○杉浦 宗敏¹, 別生 伸太郎¹, 成井 浩二¹, 笹津 備規¹

¹東京薬大薬

わが国における薬学教育は最近6年制に移行し、薬学の専門的知識を有する臨床薬剤師の養成が本格的に始動した。この背景には、社会ニーズや医療の急速な高度化が挙げられる。高度な医療を提供できる良質なチーム医療の実現には、チーム医療を構成する各職種が専門性を高めることのみならず、それらの有機的相互連携が重要となる。このためには、高いレベルでの臨床知識の共有が必要となる。薬学教育においても、より高度な臨床教育の場がハードソフト両面で求められてきた。例えば、先駆的な役割を今日も担っている「米国薬学教育」は、1960年代の患者志向のカリキュラム Clinical Pharmacy の導入に始まり、1990年代に全ての薬剤師活動の中心に患者の利益を据える Pharmaceutical Care へと発展してきた。現在、この Pharmaceutical Care を実現する教育が米国臨床薬学教育の中核となっている。

東京薬科大学では、1994年より米国カリフォルニア大学サンフランシスコ校 (UCSF)、および南カリフォルニア大学 (USC) との学術交流を20年近くに渡り実施してきた。本邦における先駆けとして、医療薬学専攻のカリキュラムに UCSF および USC の客員教授 (Pharm.D.) による医療薬学講義を導入し、さらに米国での夏季実地研修を実施してきた。このプログラムは、今般薬学6年制への移行に伴い、学部5年生の米国臨床薬学研修プログラムに発展的に引き継がれた。

本フォーラムでは UCSF および USC との国際交流プログラムの一環として実施された直近2年間に渡る臨床薬学研修プログラムの紹介と本邦の臨床薬学教育におけるその有用性について考察したい。